

「愛顔(えがお)あふれる愛媛づくり」

平成25年度「知事とみんなの愛顔(えがお)でトーク」知事講話

開催日時：25.6.11(火)

開催場所：ひろた交流センター

皆さんこんにちは。今日はこの広田の地域を会場に砥部町の皆さん、東温市の皆さん、久万高原町の皆さんがご出席いただいているんですけども、毎年、こうして各地域の皆さんと直接お話をさせていただく機会を作っていただくことで、県全体のお話を情報として皆さんにお伝えすることと、それから地域の実情というものを通じた皆さん方それぞれの意見をお聞き、県政に反映させていくというふうなことを目的に開催をさせていただいております。平日の大変出にくい時間帯なんですけれども、こうしてご出席をいただきましたことをまずもって感謝を申し上げたいと思います。

月日が経つのは本当に早いもので、私も今の県の仕事をいただきましてから2年半という月日があっという間に流れました。松山市の行政を10年以上やってきましたので、その間、松山を良くしようということに全力を注いで仕事をしていたんですけども、県全体ということになるとまず一から始めなければならなかったのも、特に県の一緒に仕事をする組織の全体の把握であるとか、そしてまた自分のやろうとしている方向性の共有であるとか、そういったところからスタートし、それからもう一つは、正直言って、いろんな地区に行く前に、長く松山で行政の仕事をしていましたから、愛媛県といっても東予や南予、隅々まである程度の事は知っているんじゃないかなということ勝手に自分で思っていたことが正直言ってあったんですね。ところが実際に20の市町をお伺いして直接いろんな話をお聞きすると、知らないことだらけで日々日々が新しい発見の連続でもありました。ただ、その中ではっきりとわかったことは愛媛県の全体が持っている魅力の高さと可能性ということでもあります。ご存知のとおりよく我々も簡単に中予、南予、東予というような単語といいますか、エリア分けのような形で言葉を使うことがあります。なるほどかつての藩の歴史もあるでしょうし、それから山によって遮られてますから、当然のことながらそこでの慣習であるとか文化であるとかこういった違いもそれぞれの地域にございます。しかし、一番感じたのは行けば行くほど風景が全く違うんですね。東予に行きますとどのまち行っても工場群なんですね。工場群が並び立っていて、四国中央市から始まって今治まで、工業都市なんだなということを痛感します。調べてみると働いている人は東予というのは約30%以上の方が二次産業の工場に勤務されているということでありました。南の方に行くとこういった工場はほとんど見られません。この広田も含めて南予の風景だと思んですけど、ありのままの自然が残っていてそこをベースにした本当に魅力的な一次産業の裾野が広いと。南予の場合は約20%が一次産業に従事されているそうでありました。松山圏域というのは商業都市ということで人口は多いんですけども、70%以上が三次産業に従事されていると。一つの県の中で3つにはっきりと違いがある。産業の違いですね。ここまで明確に分かれているというところは日本地図で見てもたんですけど無いんですね。みんな混在しているんです。この特色が奇妙なバランスを生んでまして。ある意味ではそのバランスというもののの中に愛媛県があるということを見ると、今までというのはどち

らかという横の連携というのはあまりやってなかったように思います。例えば一次産業と二次産業の技術の組み合わせであるとか、それをまた三次産業中心の松山とどう連携していくかというような行政の政策発想、それから産業界の発想というのがすごく弱かったのかなということを感じましたので、まさにここをうまくコーディネートしていくことによって新しい価値というものを生み出すことができるんじゃないかなということをおくくしながら考える時がございませう。それこそが愛媛県の魅力の源泉だろうなというふうに感じています。さてそこで実際皆さんも意外と故郷のことを、逆に近ければ近いほどその魅力というものが当たり前になってしまっていて、その価値に気付かないような時があると思うんですね。でも愛媛県といえども東予、南予のことを知っているかという僕自身も知らなかったように意外と知らないというのが現実だと思います。ましてや昔から他人の庭はよく見えるなんて言葉があるように、松山市の時なんかよく言われました。「松山市は道後温泉と松山城しかないけん」と。それに比べればよその県はと「向こうの方がいいよ」と宣伝するんですよ。「いやそんな事だったら人来てくれないですよ、もっと自分のまちの魅力に気付きましょうよ」と言って、「坂の上の雲のまちづくり」なんかどうでしょうかねと打ち出したんですけど、これを取っても最初のうちは、そんなでまちづくりできるんかいなというような反応でありました。でも良いものというのはやがて光り輝くもので、坂の上の雲がドラマ化になるともう空気はガラッと変わるんですね。あんなもんでまちづくりできるかって言ってた人の声がほとんど聞こえなくなって、「いやわしは最初から分かつたよ」とか言うてくるんですよ。それはそれでいいんですよ。でも、やっぱりその前の段階の自分たちのまちの良さに目を向ける、気付く、掘り起こす、磨く、そして受け止めて発信するということですね、ここがもうほんとにそのまちの魅力を輝かせる一番大事な視点なんじゃないだろうかなというふうになんて最近つくづく思います。あえて今日お越しになっている皆さんの地域じゃない所で発見したいいくつかの事例を紹介させていただきたいんですけども。先々週ぐらい新居浜の方に行ってきました。新居浜というイメージ的には住友のまちというイメージがあります。ここはかつて銅山があつて、徳川幕府の時代ですからね。大阪の住友家はその銅山の開発の許可を幕府から取つて、300年前にあそこを掘り始めたというところに端を発するわけなんですけども。掘つていくと本当に良い銅が出てくる。そこにどんどん人が集まってくる。あんな山の中に、当時、松山市の人口が3万4千人の時代だったそうです。その時に宇和島が1万2千人、今治が1万2千人とかそんな時代ですよ。この愛媛県という今の範疇の中で2番目に大きかつたのが、松山が3万4千人で一番ですけど、この別子山村だったんですね。1万2、3千人があんな山の上で生活をされていまして。僕は企業の宣伝をするわけではないんですけども、最初は人が銅を運んでたんですね。これじゃもうだめだということで効率を上げるために牛車が使われるようになって、牛車で輸送量が8倍になつたそうです。そのうち明治の時代になると産業革命が起つて、蒸気機関車が入つてこの後120倍の輸送量になり大きくなる。そこで会社が作られました、それがいま世界で活躍している住友金属鉱山という会社になりました。銅ですから製錬するために燃やさないといけない、燃やすとガスが出てきます。亜硫酸ガス。このガスを何とか処理しないとけないということで会社が必要だ、作られたのが住友化学という会社で、そこから掘る、蒸気機関車なんかも含めて搬出する時に機械とか搬出手段を考える会社が必要だ、作られたのが住友重機械で、やっていたらどんどん山が丸裸になつちやつたよ、環境を考えないと大変だ、木を植えなきゃといつて作つた

のが住友林業だったり、愛媛から全部誕生していくわけですよ。ほおーと思いながら、新居浜はさすが工業都市の歴史だなと思ったんです。ただ、今回行ったのはそこを学ぶためではなくて、新しいこういうところにもあえて観光資源を探してみようということで、登山というのだいたい皆さんぱっと思い浮かぶのは、やっぱり西日本最高峰の石鎚山。久万高原町からの土小屋ルートと西条から登る成就社からのルートがありますが、ちょっと話が脱線しますが、登られた方手を挙げてもらえます？半分ぐらいなんですね。もったいないですよ、本当に。日帰りでも西日本最高峰の山登り、しかも鎖を経験できるなんていう場所は他にはないと思うんですけども、成就社から登るのもいいですし、土小屋から登るのもいいんですけど、土小屋からだとも2.5キロ、成就社からだと2キロなんですけど、距離で騙されると痛い目に合うと。成就社からの方がしんどいですよね。家内と二人で歩いてそれはつくづく感じました。しかし、たった2、3時間で別世界に行けるというのに驚きを禁じ得なかったんです。こんな日帰りでも西日本最高峰の地に立てるなんていう、これは宝ですよ、この環境というのは。冬は、実は今年スキーにも行ってきました。去年は石鎚山のスキー場、今年は小田のスキー場に行っていました。今年は久万高原町のスキー場をのぞいてみようかなと思うんですけど。これ全部日帰りでもできるんですよ。こんな環境って他のまちで無いんですよ。だから、「日帰りで行けるスキー場3か所あるぜ」って県外の人に言うとびっくりされます。スキーをやらない人は全く関心を示さないんですけども、全国にはスキーの好きな人もいますからその環境に驚きます。「え～日帰り」。やってみたんですよ。去年は石鎚でしたけど、朝の9時ぐらいに家を出るともう11時過ぎには雪の上に立ってるんですよ。まず、それが信じられなかったです。スキー連盟の皆さんと一緒に滑ってイベントに出てトン汁食べて、2時ぐらいに帰りましょうと十分滑れました。2時に帰ったら、もう4時過ぎには自宅に帰ってるんですよ。これはやってみてわかりました。こういう経験が1日で、小田もそうなんですけども。知られてないことなんだろうなというふうにも思ったんですけども、そこらじゅうに宝がある、これは一つの例であります。話は戻りますが、今回、ある人に石鎚山もいいけど、他にもいっぱいいいところ山登りあるよと言って、そのうちの 하나가新居浜にある西赤石山というところだったんですね。聞いてもあまり知らない、名前は知っているけど。新居浜の知り合いにいっぱい聞いたんだけど、あそこに見える西赤石山かと。今と同じように誰か登ったことあるって言ったら、ほとんどないんですね。「そうなんだ、地元では登る機会はないんかね？」「まあいつも見てるからなあ」とこんな感じなんですよ。行ってみました。一人で行って苦しいのはいやなんで、新居浜の市長さんを引っ張り出しまして一緒に登りましょうと。新居浜の市長さんも実は登ったことがないというので、この際に行こうと言ったんです。トコトコ登っていくと、前半は1万人が暮らしていた銅山の歴史を感じさせる跡がいっぱいあるんですね。ここには病院があった、ここには2千人は入れる劇場があったと、山のほとんど山奥ですよ。ここには住居地帯があった、住居地帯に行くと上の方から住居の跡があるんですね。あの上の方にあるのがえらい人の家なんですよと言ったら、いやいや違うんですよと、ここでは逆なんだと、偉い人は下なんですと、上の方に行けばいくほど若い人達。これ今では考えられないですけど、なんでかっていうと、有毒のガスが出るので、ガスは上に行くからと「へえ～そんなことがあったんだね」。当時はこんな場所だったんだという写真付きで全部立て看板があって、地元の人たちによって、来た人たちにその雰囲気味わっていただけるような観光コースになっていました。銅山の発掘場所だった銅山を

運ぶ銅山越えというところが中間地点なんです。久万高原町ぐらいの標高800mのところから登りはじめて、1,200mのところは銅山越えで、標高が1,600mですから石鎚ほどは高くない。そのちょうど中間の1,200mのところは銅山越えで、そこまでは銅を實際運び出していましたからね、ハイキングのような感じで登って行けるんですが、これは前半戦です。そこからまた全然別なんです。今度は石鎚山に匹敵する本格的な登山道が待っていて、ここから急になってきます。ここで銅山越えについていた時に、突然市長さんが「知事すみません。私今から公務があるんで、ここで失礼させていただきます」と言って突然帰られてしまいました。今度は絶対、市長ともう一回一緒に行こうかと思ってるんですけども。そこへ登って行きますと、これはなんで良いかという高山植物なんです。ここでしか見られないものがあるということで有名なんだそうです。知らなかったです。ツガザクラ。それからアケボノツツジというのはどこにもありませんけど、ツガザクラというのは通常2,500m以上でしか生息しないのに全国で唯一1,600mぐらいで生息している場所がこの西赤石山なんだそうです。道行く人に声かけてみたんですよ。割とお年寄りの方が多かった。夫婦の方とかグループの方とか、「こんにちは、どこから来たんですか」と言ったら、高知、香川、岡山、大阪、全部県外なんです。結構知られているんだ。やっぱり高山植物なんです。集団で来ていました大阪から来た人に聞いたんですよ、「なんでここを知っているんですか」と、そうしたら、毎年この季節になるとツガザクラ、アケボノツツジの西赤石登山ツアーという商品が毎年出ていて、これが知る人ぞ知るコースになっていていつも満杯ということも僕も初めて知りました。2泊3日の旅とかになっていましたけど、そんな商品があるのは全然知らなかった。あんな所に価値があるんだなということを感じました。ある意味では、この一日日帰りの登山によって産業の歴史と本格的なツアーを1日で2種類も味わえる日帰りコースがあって、これ新しいコンテンツとして十分検討に値するものなんだなということも自分でも発見した思いがいたしました。この前は久万高原の方にお邪魔して、久万高原で1泊させてもらったんですけども、本当にどうしても買って帰ろうと思っていた久万の清流米、なんとか手に入れて帰らせてもらいました。本当に今の新居浜のことなんか知らない方も多いと思いますし、去年、逆に南予のほうで宇和島市まで高速道路が開通しましたので「いやし博」というのをやったんです。この機会に愛南町から含めて是非その魅力を多くの人に知ってもらおうと。それぞれのまちは皆さんが主役ですよ、皆さんがやるんだというふうになってくれなかったらイベントうまくいきません。行政が言ったからやるんだといったら、やらされる感から脱出できないので、人ごとになってしまうんです。そんなところからスタートして、皆さんに考えてもらいながら立ち上がってもらいました。いろんなアイデアが出てきて170ぐらいの自主企画イベントを含めてやりました。もちろんコアのイベントは行政主導になりますけど、それ以外は今までやっていることをこの機会に少し磨いて一緒にして情報発信しちゃおうというのがほとんどであります。愛南町に行ったら、この前も高知の知事との会議で行ってきたんですけど、外泊というところがあって、これ不思議ですね。海岸沿いを歩いているとその集落だけなんです。隣の集落へ行くとそんな風景全くないんです。昔から風の関係なのかプライドなのかわかんないですけど、その外泊いう集落だけ田んぼも家も全部石積みのブロックになってるんです。だからもうミニお城みたいな石垣がドーンとその山だけずらっと並んでいるんです。それで隣もといったら隣はそういう風景全くない。それが誇りになっているんです。その独特の風景に魅了された版画家がそこに

住み着いたり。いろんなことが行われているのも知りました。松野町に行ったら滑床溪谷というきれいな溪谷があります。そこで新しい溪谷を使ったイベントをやるんだと、この機会に。これは全然聞いたこともなかったんですけど、キャニオニングというイベントで、たまたまそこは上の方に雪輪の滝というのがあって40m、50mの滑れる、滑った先は滝壺ドボンという傾斜のツルツルのところがあるので向いているということなんですけど。このキャニオニングというのは、溪谷を使って滝壺に飛び込んだり、滝を登って行ったり、滑り台を利用して楽しんだり、ということをするそうなんです、一回来てくれと言われて。宣伝のためにその雪輪の滝ドバーンていうのをやってくれって言われたんですよ。いいですけどって言って、聞いたらそれは1日コースに入って、初心者ですから水に慣れて、少し小さいところを滑ったり体験を積んで徐々に上がって行って1日コースの最後にさあ皆さん今日の一日の成果をここで出してくださいって、50mドーンなんです。僕はその時間がないんですよ。着いたらいきなり雪輪の滝に連れていかれたんですよ。見たらこんな傾斜ですよ。模範示すから見ててくださいっていったら、模範者がヒャーとか言ってるんですよ。「いや、ちょっと待ってください」と言っても「もうニュースのカメラも並んでいるんで行ってください」と言われまして。町長さんも一緒かなと思ったら、町長さんは背広を着ているわけですよ。しょうがないからロープを伝いながら上がっていきまして、上見たら断崖絶壁ですよ。さすがに僕も腰が引けちゃうんですね。わかりますかね、一步が踏み出せないんですよ。ずーっと下がっていたら、ニュースのカメラマンの人が「早く降りてきてください」とか言って、無情な声をかけてくれましたけども。去年目標は1,000人の方が来てくれればいい、ということだったんですが、実際は1,500人でした。今年どうって聞きに行ったら、大阪あたりからもどんどん来ててもう大変なんですと、もう何人になるかわかりませんといううれしい悲鳴が上がっていました。このままいけばちゃんと人も雇えて、キャニオニングというイベントの体験コースというのが正式に事業として成り立ちますという声を聞いて、すごくうれしかったですね。こうしたようなことは、今日はあえて他の地域のことに触れさせていただきましたが、地域の魅力というのは本当に思わぬところに眠っているということを申し上げたかったわけでありまして。さて、もう一つはこれからの世の中を考えると、皆さんもご存じのとおり少子高齢化ですから、愛媛県の30年後の人口が、今141万ぐらいですけども、107万まで減るんじゃないかという数字が今年の2月ぐらいの新聞に出ていました。これは別に愛媛県だけのことでなくて、日本人全体が減ると、全国が減ると、1億2千万人が9千万人ぐらいになってしまうという予想なんです。遠い話のようでいて遠くない話で、かつての時代一番多かった時には1年間に270万人の日本人が生まれていたんですけども、現在は100万人でありますから3分の1近くまで減っているわけですよ。こうなってくるとやがて今もその兆候が出てきていますが、働く人の人数が減って、福祉サービス等々が必要な方々がどんどん増えていくという社会になっていきます。今の制度持つわけがないですよ。じゃあそれを持たせていくためにはどうするか、仕組みを考える必要がある。方法は3つしかありません。一つは必要なサービスがどんどん増えていきますから、税金をどんどん上げてそのお金でサービスを提供し続ける。でもこれ働く人がやる気を失って社会が停滞してしまいます。もう一つの方法は税金上げないけど、福祉のサービスをどんどん削っていく。でもこれで、はたして世の中が成り立つのかどうか。これも現実的ではない。となるともう一つの方法。可能な限りの必要なサービスは公が提供し、足らざるところについ

ては新しいパワーでカバーしていく連携型。そのパワーとは昔ながらの地域のコミュニティの場合もあれば、NPOの場合もあれば、ボランティアの場合もあれば、そこが単独でやるのではなくて、大きな社会という中の仕組みの中で連携プレーをするという仕組みをどうしても作っていかないとこれは乗り越えることができないわけでありまして。同時に、もう一つの考えておくべき問題点は、日本全体の人口が減ることになりますからマーケット、市場が小さくなるということですよね。いくら農産物で良いものを作っても買ってくれる市場そのものが小さくなるということを考えて、将来を見通しておく必要が出てきたということでありまして。特にマーケットは深刻でありまして、大きな企業はもう既に海外に進出して、ものづくり産業なんかいろんなことやっていますけれども、一次産業はそうはいかないですよ。最終的に今のTPPがどういうふうになるのかは全く見通しつきませんけれども、それと同時にこちらからも売るということを考えておかないと、どうせ対象となるマーケットが小さくなるのが分かっているのであれば、その小さくなった分どこか補うところを見つけないといけませんよね。運べる距離で言ったらやっぱり東アジアまでだと思います。東アジアというものにどう愛媛県の東・中・南予で作られている、これは二次産業の技術もそうですし、そして一次産業のさまざまな商品もそうですし、この道筋をつけるかということを考える時期が来たなと思いました。ただ実際作っている方がいきなりそこへどうやったらといってもわかりませんよね。だから、これをチーム愛媛でやるんだということで、愛媛県の中に今、営業本部というのが立ち上がっています。今年からその実現に向けてシンガポールと台北に県の職員が駐在ということで行くようになりました。シンガポールというのは面積は淡路島ほどなんです、人口560万人くらい。淡路島ぐらいの面積なんですけれども、港湾と石油と会議と金融、この4つの産業で成り立っています。何人ぐらいの人が行き来するかといったら7千万人の人が出たり入ったりしているんですね。淡路島ぐらいの面積だからどうかと思ったんですが、日本食大好きな方多いですね。外食が中心で。いったい何件ぐらい日本食レストランがあるのか調べてみると、淡路島ぐらいの面積の中に現在800店舗あるんですね、日本食レストランが。これはすごいなと、攻めていきます。ただ行ってこんなもんがありますって言ったって意味がない。パートナー見つけてレストランを借り切って愛媛に興味のある人と一緒に行きました。そこで調理方法を提案して実際に食べてもらいます。食べてこれ扱ってみたいとなったらパートナーの会社がそっちに構えていましてすぐ商談と、こういう仕組みを作り上げた上で行ってきました。愛媛の魚、最初のスタートですけどその一日だけで500万円成約しました。先週、その時に課題となっていた養殖のマグロ、これ1本数十万円しますので定期的に商売ができましたらかなり大きいですね。このオーダーもついに成約になりまして、松山空港からシンガポールに向けて、捕ってから3日で届けられるという流通の工夫ができましたので、これはもう定期的に愛媛県のマグロを扱いたいというお店と契約ができて、飛行機で運ばれていきました。値段は高いです。でも今、食の安全というのが世界でも大きな課題になってきています。先日、ある大国の大学の関係者が愛媛県に来られました。何のために来たんですかと聞きますと、その国は有名な湖があって最近その湖で毎日すさまじい数の魚がボコボコ浮いてくるんだと、工場廃液ですよ。とてもじゃないけれども自分たちの知識では水質の浄化ができない。だから大学の技術をぜひ貸してほしいという。その魚食えないなと思いました。そんなことしていると翌週、同じ国で、これはニュースでご覧になった方もいらっしゃると思うんですけども、川に突如、豚の死

骸1万匹漂着なんてニュースが流れました。肉もダメかな、大丈夫なのかなと、これが現実です。だから余計に安全・安心しかも品質のいい日本の生産物に対する関心はどんどん上がっていくというふうに思います。どうそれを結び付けられるか、行政は今まではそういう仕事っていうのはほとんどやったことがなかったと思うんですけども、行政の新しいやるべき仕事なんだということを今県職員と議論しながら愛媛県のともかくいいものを発見して磨く、愛媛県のいいものを発見し売り込んでいく、こうしたことに県下の各市町の皆さんと一緒にやって道を切り開いていくということが笑顔につながるんだというように取り組んでいるところであります。ちょうど30分経ちましたので始めのご挨拶はこのへんで終わらせていただきまして、あとは皆さんそれぞれからご意見を頂戴しながら対話をさせていただけたらと思います。